

研究ノート

## 科学と仏教の間

——疑似科学を題材として——

蓮見 高円

### 始めに

かつて私が大学で化学の研究室に所属していた頃、ある友人から「君は科学者なのに、非科学的な死後の世界を信じているのか？」と聞かれたことがあります。

私が現宗研の研究者として、「科学と仏教」というテーマを与えられ、既に二年余りが過ぎました。そろそろ、テーマに対する何らかの回答をしなければならぬ時期だと思えます。未だ結論の出ない大問題ですが、試みに「疑似科学」を足掛かりにし、現時点での暫定的な回答を試みたいと思えます。

かつて上手く答えられなかった友人の質問にも、ここで答えたいと思えます。

### 血液型占い

日本人が大好きな話題の一つに、「血液型占い」があります。ご存じのように、これはA B O血液型を属性とした性格診断であり、血液型と性格や行動には関連があるという説です。「血液型によって性格が異なる事は、統計デー

タでも確認されている。血液型によつて特定の病気への罹患率が異なる事から、性格にも影響があると推測される」などと主張されています。しかし、これは全く科学的ではなく、疑似科学に他なりません。

なぜ疑似科学と言えるのか？ それは、日本の心理学者が膨大な研究の蓄積をした結果、「科学的に正しい」と言う証拠が無いからです。例えば、血液型占いの根拠として統計データが出される場合がありますが、そういう統計に限って、科学的に意味のある統計にお目にかかったことがありません。ここでいう「科学的に意味のある統計」となるには、幾つかの条件があります。最低でも、「ランダムサンプリング」「十分なサンプル数」「先入観の排除」などが満たされている必要があります。そして、仮説の証明となるには、「追試による再現可能」「同趣旨の複数の調査で同一傾向が認められること」などが必要でしょう。そして、そのような科学的に意味のあるデータでは、「血液型と性格に統計的に有意の差は無い」と言うのが結論となっています。

この様に、「統計」や「データ」などという「科学っぽい用語」に騙されることなく、それが「科学の手法、考え方に則っているのか」が重要なのです。

また、根拠の一つとして挙げられた「血液型によつて特定の病気への罹患率が異なる」と言うことが疫学的に正しかったとしても、「だから血液型によつて性格が異なるのだ」ということにはなりません。なぜなら、病気への罹患率と性格の相違に因果関係がある事を全く説明していません。それ以前に、そもそも「血液型によつて性格が異なる」という現象が観測されていなければ、成り立たない論理だからです。

ではなぜ、人は血液型占いを信じてしまうのでしょうか？ 先のように「科学っぽい用語」に騙されたという理由もあるでしょうが、一番大きな理由は、「誰にでも当てはまる」ことが書かれているからです。例えば、「あなたは社会的で愛想が良い時もあります、その一方で内向的で用心深い時もあります。」と性格診断をされたら、多くの人が自分に当てはまっていると考えるでしょう。これは「バーナム効果」と呼ばれる心理学的現象として知られていま

す。

この様に、「個人的な主観として当たっているように思える」ことと、「それが客観的、科学的に正しい」ことは一致するとは限らないのです。

まあ、血液型占いは、本気で信じている人も少ないでしょうし、害の少ないものであり、精々私が血液型を聞かれるたびに少々不愉快になる程度の問題でしょう。

## 水からの伝言

しかし、十数年前に、大問題になった疑似科学があります。「水からの伝言」という本をご存知でしょうか？ 江本勝という方が出版された水の結晶の写真集です。

驚くべきことに、江本勝氏は、「水が人間の言葉を理解する」と主張しているのです。即ち、水に「ありがとう」などの「よい言葉」を見せると、きれいな結晶ができて、「ばかやろう」などの「わるい言葉」を見せると、きたない結晶ができると主張したのです。江本氏の著書などによれば、その実験方法は左記のようです。

- ① 水が入った容器の底を叩く。
- ② 水に言葉を見せたり、音楽を聞かせたりする。
- ③ 水をシャーレにスポイトで滴下する。
- ④ マイナス二〇度の冷凍庫で二〜三時間冷やす。
- ⑤ シャーレの中で水滴が冷え、丸く盛り上がった水の粒が出来る。
- ⑥ これをマイナス五度の低温室に運び、突起部分にライトを当てて顕微鏡で観察。

⑦ ライトがあたって氷の一部が融け始めると同時に結晶の成長が見られる。

⑧ 任意のタイミングで写真撮影を行う。

※撮影が出来るのは二分程度。結晶はやがて融ける。

結晶ができるのはサンプル五〇個に対して、数個〜三〇個程度。

温度を測り、顕微鏡を使うなど、いかにも科学的で正しい結果を出しそうな「実験」です。結果についても、著書を見ると、確かに「ありがとう」の水では、雪のような六角形の美しい結晶の写真が提示されており、疑いのような証拠のように思えます。

しかし、これは疑似科学です。

実際には何が起きているのでしょうか？ 江本氏の実験方法から、冷凍庫から出してきた冷たい氷の先端に、空気中の水蒸気の水分子が付着して六角形の樹枝状結晶を作り出す「気相成長」が起きていることが解ります。

ではなぜ様々な結晶の形が観測されるのでしょうか？ これについては半世紀も前に中谷宇吉郎博士が詳細な研究を行っており、「気相成長における水の水蒸気量で決まる」事が明確になっています。

江本氏の実験では、零下二〇度の冷凍庫から零下五度の部屋に出し、照明を当てて加熱しているため、氷の温度が刻々と変化しています。その変化の過程で、たまたま樹枝状結晶の気相成長に最適な温度を通過した時に、写真集の様な結晶の成長が観測されます。また、湿度も制御をしていないため、その形は様々な形になります。この様に、「美しい氷の結晶の写真が撮れる」と言うこと自体は、間違ってもないし、嘘でもなく、科学的な法則に則った実験結果にすぎません。

では「見せた言葉によって綺麗な結晶が出来たり出来なかつたりする」というのは「科学」なのでしょうか？ 先

述のように、結晶の形は温度や湿度で決まり、どんな言葉を見せたかは関係がありません。最大限好意的に解釈すれば、これは観測者の「思い込み」によって起きた結果でしょう。前項の血液型占いのように、人間は自分が信じたい事を信じてしまいがちです。この実験方法では、綺麗な樹枝状結晶が出来るのは極僅かな確率でしかなく、出来ても極短時間で融け、出来るものも極小さな結晶としてしか観測されません。江本氏の説を信じている観測者なら、「ありがとう」という水では目を皿のようにして美しい結晶を真剣に探すでしょうし、「ばかやろう」ではそれほど真剣に探さず、融けて形のくずれたきたない結晶を撮影することでしょう。

科学的な実験方法では、このような観測者の思い込みを回避するために、「盲検法」という方法を用います、即ち観測者に自分が今調べている物がどのサンプルなのかを知らせないで観測させるのです。少なくとも江本氏の初期の実験では、この盲検法は採用されていないようなので、観測者の思い込みが原因という仮説は正しそうです。

そもそも、江本氏が言葉を見せたのは、シャーレの中の水です。それに対して、撮影したのは、言葉を見せてない空気中の水分子が気相成長で結晶化したものです。この一点だけを挙げて、江本氏の主張が間違いであることは明らかでしょう。

さて、ではこの「水からの伝言」の何が大問題になったのでしょうか？ 私はこの様に荒唐無稽な説を信じる人などいないだろうと思ひ、無関心でした。しかし、この「水からの伝言」をうっかり信じてしまった人が、沢山いたのです。あまりに美しく、道徳的にも素晴らしい説明であったため、多くの人が信じてしまい、「水からの伝言」は、ベストセラーとなりました。更には、小学校の教師がこれを信じ、道徳の授業で使うようになってしまったのです。T O S S（教育法則化運動）という教師が授業の進め方の技術を共有するサークルのサイトがあります。そこで、「水からの伝言」を使った授業の実践例が沢山掲載されました。

それらは左記のような内容でした。

① 「ありがとう」と「ばかやろう」の結晶の写真を見せる。

② 言葉には水の結晶を変えられる力がある事を説明。

③ 人間の体の七〇％は水でできていることを説明。

④ だから友達に向って乱暴な言葉を使うと体の中の水が汚くなってしまっているので、綺麗な結晶になるように、お友達にはいい言葉を使いましょうと言う。

ここまで話を聞かれた皆さんは、これがいかにナンセンスな内容なのか、よくお分りになるかと思います。それ以上に問題なのは、この授業を進めるためには、②の段階で、明らかに非科学的な疑似科学を、正しいものとして教えることになる点です。よくある道徳教育のように、寓話やフィクションを題材とするならば、それは最初から「お話」である事がわかっています。しかし、「お話」ではなく「科学」として、嘘を実験事実として教えるのは、大問題でしょう。

また、別の問題もあります。そもそも、道徳の根柢を科学に求める姿勢です。道徳が何かと言う議論を始めると長くなるので割愛しますが、少なくとも心のありようの問題である道徳を、全く関係のない物質の法則である科学で説明しようとするのは、無理がある話でしょう。

その後、このような教育現場の現状に驚いた多くの科学者が批判の声を挙げた事により、現在はTOS Sのサイトから「水からの伝言」を用いた授業例は削除されています。

同様の疑似科学は、これらの他にも「マイナスイオン」「EM菌（有用微生物群）」「一〇〇匹目の猿」「ゲーム脳」などなど、沢山あります。私はこの様に荒唐無稽な話を信じる人が数多く居ること自体が信じられませんでした。

## 江戸しぐさ

しかしながら先日、私も所詮同じ穴の貉であったという事を思い知らされました。

さて、皆さんは「江戸しぐさ」というものをご存知でしょうか？ AC（公共広告機構）のCMをご覧になった方や、東京メトロでポスターを見た方もいらっしゃるかと思います。まずは、「NPO法人江戸しぐさ」による、江戸しぐさの解説を見てみましょう。

「江戸しぐさ」は、江戸商人のリーダーたちが築き上げた、上に立つ者の行動哲学です。よき商人として、いかに生きるべきかという商人道で、人間関係を円滑にするための知恵でもありました。

<http://www.edoshigusa.org/about/>

この様に、「江戸時代から伝えられた、江戸のマナー」として紹介されています。具体的な江戸しぐさとしては、「傘かしげ」「こぶし腰うかせ」などがあります。

「傘かしげ」とは、「商人道江戸しぐさの知恵袋」（越川禮子著、講談社）で、「雨や雪の日、道路ですれ違うとき、相手も自分も傘を外側に傾けて、一瞬、共有の空間をつくり、さっとすれ違おう。お互いの体に雨や雪のしづくがかからないようするとともに、ぶつかって傘を破らないようにする実利的な意味も含んでいた。」と説明されています。

同じく、「こぶし腰うかせ」については、「川の渡し場で、乗り合い船の客たちが船の出るのを待っているとき、あとから乗ってきた新しい客のために、腰かけている先客の二〜三人は、腰の両側にこぶしをついて、（あるいはこぶし分）軽く腰を浮かせ、少しずつ幅を詰めながら、一人分の空間をつくる。…現在、電車やバスでこんなしぐさを見るのはまれになった。」と説明されています。

このような解説を見て、私は、「江戸の人たちは素晴らしいマナーを知っていたんだな」と素直に感心し、参考に

しようと思っていました。

しかしながら、昨秋発刊された「江戸しぐさの正体」（原田実著、星海社新書）を読み、実は江戸しぐさが疑似科学の一種であることを知りました。

以下、原田氏による江戸しぐさの検証内容を要約して紹介いたします。

まず「傘かしげ」についてですが、江戸時代の江戸では、京や大阪にくらべて和傘の普及が遅れ、江戸っ子は主に雨具として頭にかぶる笠や、蓑を使用していたので、そもそもかしげる傘がありません。更に、現代のスプリングの入った洋傘と違い、和傘はすばめるのが容易であり、錦絵などにもすばめて和傘を差す人物が描かれています。よって、すれ違うときは傘をすばめればいいので、同時に傾げなければ一方が濡れるような「傘かしげ」をする必然性が全くありません。

また、「こぶし浮かせ」についても、浮世絵などから分かるように、江戸時代の渡し船は馬や荷物を主に載せるものであり、ついでに乗せる人間用の座席などはなく、譲るべき座席はありません。いくら腰を浮かせても、無いものを譲ることはできません。そもそも、渡し船は、出発直前に船頭の合図で一斉に乗り込むので、「あとから乗ってきた新しい客」などという席を譲る相手自体が存在しないはずなのです。このように、こぶし腰浮かせは、現代のバスや電車のように長い座席のある乗り物でしか役に立たないマナーなのです。

あるいは、「ロクを磨く」という江戸しぐさがあります。前述の「商人道」では、「商いには人を見抜き、雰囲気を探する鋭い六感は絶対に必要だった。六感がはたらくことが、江戸で生きていくための、生命を維持する、あるいは商売繁盛を約束する大もとだった。」と書かれており、江戸っ子たちは、「ロク」によって、関東大震災を予知して避難したという話もされています。しかし、仏教者ならすぐわかると思いますが、江戸時代の日本の認識論は、仏教の唯識による眼耳鼻舌身「意」の六識説でした。現代では、第六感という超能力を意味しますが、それは西洋文化で



あり、日本に入ってきたのは明治以降です。江戸時代に「ロク」と言うはずがありません。

原田氏はこのほかの江戸しぐさについても、内容が江戸の実態にそぐわない事を論証しています。

そもそも、江戸しぐさには、典拠や出典がありません。これに対し、NPO法人江戸しぐさでは、江戸時代から口伝によって伝えられてきた教えであるとしています。更には、幕末に薩長が「江戸っ子狩り」を行い大虐殺が行われて、江戸っ子は地方に逃げ「隠れ江戸っ子」になったが、更に彼らも戦中の徴兵によって戦地に行かされたことごとく死に絶え、ただ一人の伝承者の芝三光（しばみつあきら）氏が生き延びて、現代に伝える事が出来たからだと言っています。もちろん、江戸っ子狩りなる大虐殺の存在をしめす文献など何一つとして存在していません。あまりに荒唐無稽な説明と言えるでしょう。そのような荒唐無稽な来由を持つ江戸しぐさ自体も、荒唐無稽なものであると言わざるを得ません。

江戸しぐさとは一体何なのでしょう？ 原田氏は、江戸しぐさの正体とは、芝氏がロンドン在住中に見聞した英米式マナーではないのかと推測しています。そう考えれば、どの江戸しぐさも、西洋化した現代社会によく対応するマナーばかりであることに非常に納得がいきます。

来由がどうであれ、江戸しぐさが良いものであるならば、使えばいいのではないかという意見もありますが、それならば、創始者である芝氏の検証をし、江戸しぐさ自体の内容も検証する必要がありますでしょう。原田氏は、「江戸しぐさは芝の反骨の産物である。」とし、芝氏が江戸しぐさを作り上げていく過程自体に問題があるのではないかと疑義を呈し、さらには、江戸しぐさには、マナーとして問題があるものが含まれているのではないかと主張しています。

現在、「江戸しぐさ」は前項の「水からの伝言」と同じように、教育の現場にまで浸透しています。前述のTOS Sに道徳の授業例として提示されているだけでなく、文部科学省が編集出版した、平成二十六年から使用される

「私たちの道徳 小学校五・六年」と言う冊子に、江戸しぐさが取り上げられたのです。

原田氏は「江戸しぐさは直ちに教育現場から追放すべきである。マナーや道徳を説くならば、欧米式マナーや茶道など、子供たちに対して嘘をつかなくてもよい格好の教材がある。それらを活用するのがあるべき姿であろう。」と結論しています。

この事に対して、皆さんはどう思いますか？（後で重要になるので、ご自身の感想を覚えていてください。）私は、原田氏と同様、あるいは「水からの伝言」の時と同様に、「嘘を根拠に道徳を教えるのは怪しからん。即刻学校教育から江戸しぐさを追放すべきだ。」と思いました。役に立つマナーであるから嘘であっても方便として学べばいいのではないかという意見もあるでしょうが、子供たちが後になって嘘であると分かったならばショックを受け、学校教育全体に対する不信感を植え付けかねません。

## 江戸しぐさ非江戸っ子説

さて、「江戸しぐさは、歴史上の江戸っ子のマナーではなく、後世に芝氏が創作したものだ」という「江戸しぐさ非江戸っ子説」と考えたとき、似たような問題が連想されました。即ち、「大乘経典は歴史上の釈尊の直説ではなく、後世に成立したものだ」という「大乘非仏説」です。もし同様の問題であるならば、それに対する私の反応も同様であるべきではないでしょうか。ここで、先ほど皆さんが江戸しぐさに対して思ったことを思い出してください。私自身は、「大乘仏教という嘘を根拠に教えるのは怪しからん、即刻宗教界から大乘仏教を追放すべきだ」とは、考えていませんでした。私自身、気が付かない内に護教論的な発想をしており、ダブルスタンダードに陥っていたのです。

御存じのように、この大乘非仏説に対しては、各界より様々な反応がありました。しかし、大乘諸宗は未だに、歴

史上の釈尊の教え、大乘仏教の教え、その発展である各宗祖の教えをどのように受け止めたら良いのか、明確な回答を示してはいません。

では江戸しぐさと同様、「大乘仏教という嘘を根拠に教えを説くのは怪しからん、即刻宗教界から大乘仏教を追放すべきだ」と結論づけなければならないのでしょうか？

先程の言動と矛盾するようですが、私はそうは思いません。なぜなら、大乘非仏説において否定をしているのは、「歴史上の釈尊の直説」という部分であって、江戸しぐさのように、その内容や、成立における作成者の志に対して疑義の呈されているわけではないからです。

そもそも、仏典の正当性を歴史的な事実を求めることに意味があるのでしょうか？ それは「歴史上の釈尊が説かれた教えなら、絶対に正しい真理である」という単なる釈尊無謬説に過ぎないのではないのでしょうか？ 内容が正しい教えであるか否かは、説いた人ではなく、内容で判断されるべきでしょう。

ですから、法華経は歴史上の釈迦が説いた教えではないと認めた上で、その内容について正しさを主張すれば良いのではないのでしょうか。

## 科学と仏教の間

さて、前項で人文科学と大乘仏教の問題について触れましたが、科学一般と仏教の関係はどう考えればいいのでしょうか？ 科学万能教と揶揄されるほど、科学への信頼があつい現代、ややもすれば仏教は非科学として否定されかねません。

科学と仏教の関係性については、様々な意見がありますが、私は大きく分けて、①一致、②対立、③独立、の三つに分類されると思います。

① 科学と仏教は一致する

「量子力学の最先端の結論を仏教が既に述べていた」などと、科学と仏教の類似性をこじつけて、それによって仏教の正当性を主張する論がしばしば見受けられます。しかし、仮に類似性があったとしても、それがそのまま正当性を主張する根拠になるとは限りません。

そもそも、仏教の正当性を科学に求める姿勢は、先述の「水からの伝言」で道徳という心のありようの問題を全く関係のない物質の法則である科学で説明しようとする姿勢と同じではないでしょうか。

いずれにせよ、僅かばかりの類似性を以て仏教の正当性の根拠にこじつけることは厳に慎まなければならないことでしょう。

② 科学と仏教は対立する

「科学と仏教は矛盾する、だから科学（又は仏教）の方が間違っている」という主張も良く聞きます。冒頭の「君は科学者なのに、非科学的な死後の世界を信じているのか？」という質問も、この考えを前提にしているでしょう。

しかし果たして科学と仏教は矛盾するのでしょうか？ 私は「矛盾する部分もあるが、すべて矛盾するとは限らない」と考えます。なぜなら、科学が適用可能な範囲は、限定されているからです。

まず、そもそも現象を観測できない事は、科学では扱えません。例えば、人は死んだら生き返りません。仮死状態になった後に息を吹き返す事はありますが、それは死んでなかっただけです。ですから、死後の世界が有るか否かは、科学では取り扱えないのです。よって、「死後の世界は非科学的」とは「科学では扱えない」と言う意味であり、「科学的な意味で否定」されているのであって、科学が「死後の世界は存在しない」と言っている訳ではないのです。

なお、「科学的な意味で否定」という言葉は、「現時点において、その説を肯定する根拠が存在しないので、間違っている物として扱う」という意味であり、将来肯定的な証拠が見つかる可能性を否定していませんし、その説が真理ではないと言っている訳でもないのです。ですから、証拠が見つければ簡単に否定が覆るのが、「科学的な意味で否定」の意味なのです。例えば、ニュートン力学で全ての物理現象が記述できると言われていた時代に、相対性理論が最初に世に出たとき、「現時点において、その説を肯定する根拠が存在しない」と「科学的な意味で否定」されています。やがて、相対性理論が正しいと言う動かぬ証拠が次々見つかったため、「科学的な意味で否定」は覆り、「大発見」となりました。

なお、「水からの伝言」は、正しいと言うだけの科学的な証拠がないので「科学的な意味で否定」され、疑似科学であるとされています。ですがもし、万が一、億が一、既知の科学的知見を全て覆すに足るほどの決定的な証拠が見つかったならば、相対性理論の時のように、科学者は「水からの伝言は正しかった」と言い、既知の物理法則を全て根底から構築しなおさなければならなくなるでしょう。（ちなみにもしそうなったら、科学者は既知の科学を全て覆されてガツカリするどころか、新しい研究分野が見つかったことで大喜びするでしょう。）まあ残念ながらそのような「大発見」が起きうる確率はあり得ないほど小さいでしょう。逆に言えば、既知の科学的知見と大きく矛盾する「水からの伝言」は、提示された「証拠」が「既知の科学的知見を全て覆すに足るほどの決定的な証拠」と言うにはあまりに貧弱であったが為に、論外に否定されているとも言えます。

また科学は、再現可能性を以て客観性を保証しています。簡単に言えば「誰にでも再現できるもの」しか扱えないのです。逆に言えば、再現不可能なことは、科学では取り扱えません。例えば、宗教にしばしばみられる「奇跡」は、科学では扱えないのです。ですから、それらは大概「科学的な意味で否定」されます。

さらに科学は、再現可能な多数の観測事実から、それらを上手く説明できる仮説を導き出すと言う帰納的な手法で

科学法則を構築しています。ですから、ある法則に反する例外が見つければ、その法則は否定されてしまいます。例えば、「このカラスは黒い、あのカラスも黒い、観測されたカラスは全て黒い」という観測事実から、「全てのカラスは黒い」という法則を導きます。しかし、白いカラスが観測されたたん、「全てのカラスは黒い」という法則が間違っていることとなります。実際に、白いカラスは実在しており、「全てのカラスは黒い」と言う法則は間違いなのです。

科学内部の理論における限界もあります。例えば「ミクロの世界において、ある粒子の運動量と位置を同時に正確に知ることは、原理的に不可能である」という不確定性原理から、科学は全知になる事は不可能です。また、「ある無矛盾な形式的論理体系において、その真偽が判定できない命題が存在しうる故に不完全である」という不完全性定理より、科学自身が無矛盾である事も不可能である事が解っています。

これらのように、科学は全てを説明できる万能の道具ではなく、適用可能な範囲が限定されているのです。「科学と仏教は矛盾する」と主張する人は、しばしば科学の適用可能な範囲を超えて、仏教を否定しようとしています。これに反論するには、科学の適用可能な範囲をしっかりと把握し、「科学が何を主張し何を主張していないのか、何を否定して何を否定していないのか」を正確に理解する必要があるでしょう。

### ③ 科学と仏教は独立である

さて、このような科学の適用範囲を踏まえると、科学と仏教の関係はどうなるのでしょうか？

科学は、基本的に観測された現象に対して、その起源・構造・運動・変化などの法則性を明らかにするものであり、「なぜに成えられない科学」と揶揄されることもあるように、その理由を求めるものではありません。例えば、ニュートンはリングが落ちるとい現象に対し、「万有引力があり、それが距離の二乗に反比例する」という法則を想定

すると現象が上手く説明できることを発見しました。しかしながら、「なぜ万有引力が距離の二乗に反比例するのか」は説明できません。

一方、(大乘) 仏教は「願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成仏道」に代表されるように、(自他の) 成仏を目的としていると言えるでしょう。或いは、「宗教」という大きな枠で捉えれば、「価値観」を与えること、意味を与えること、「なぜ」に答えを与えることが目的とも言えるのではないのでしょうか。

よって私は、科学と仏教には確かに一致する部分も、対立する部分もありますが、基本的に目的も手段も異なる独立であり、「共存可能な赤の他人」とでもいうべき関係なのではないかと思っています。もちろん、その間には、どちらともつかないグレーゾーンが存在します。科学の適用可能範囲や限界について論じましたが、科学はあらゆる神秘を否定しようとするものではありません。むしろ、範囲外については、「分からない」と神秘の存在可能性を認める面もあります。そのような範囲においては、科学と仏教はお互いにお互いの領域を侵すことなく、対話することが出来るのではないのでしょうか。

## 説得力とリアリティ

さて、ここまでの議論を踏まえ、冒頭の「君は科学的な死後の世界を信じているのか？」という質問に私なりの回答をするならば、「科学では死後の世界が有るとも無いとも判断が出来ない。それは科学の適用範囲外であるからだ。ならば、私は久遠実成の釈尊、宗祖の教えに従い、死後の世界が有ると信じる。」と答えるでしょう。

しかし、ここで問題になるのは、その説明に「説得力があるか」です。大乘非仏説の項でも、「大乘經典の内容について正しさを主張すれば良い」と述べましたが、その「正しさ」に説得力を持たせるにはどうしたらいいのでしょうか。

うか？

単に「私はこう信じたい」というだけでは、私の信仰告白に過ぎず、「久遠実成の釈尊が言ったから、大乘仏典に書いてあるから、宗祖が言ったから」などという理由では、仏教徒や日蓮宗門下ではない人間には全く説得力のない説明でしょう。もちろん、科学では判断できない範囲である以上、説得力を持たせるのに科学を用いるのは無理な話です。

では、自分自身が今現在なぜ信じているのかと自問すれば、それは「リアリティを感じるから」と答えるでしょう。そしてなぜリアリティを感じられるのかと自問すれば、左記の文章が答えでしょう。

『禮誦儀記』に「止観に二十五方便を明かすに、事に託して理観を成ぜしむ。故に今、事について理を談じ、蓮心親行の指南とするなり」とある。宗定法要式 第二章行軌作法編 第二章七方便

であるならば、他者にリアリティと言う説得力を与えるには、共に「事」を行じることが手段の一つとなるのではないでしょうか。

### 参考文献

- ・科学と神秘の間 菊池誠 筑摩書房
- ・おかしな科学 渋谷研究所X+菊池誠 楽工社
- ・人はなぜ迷信を信じるのか スチュアートAヴァイス 朝日新聞社
- ・季刊 理科の探検 二〇一五年春号（株）文理
- ・水からの伝言 江本勝 波動教育社
- ・水は答えを知っている 江本勝 サンマーク出版
- ・水はなんにも知らないよ 左巻健男 デイスクヴァーイ携帯



- ・ 商人道「江戸しぐさ」の知恵袋 越川禮子 講談社
- ・ 暮らしうるおう江戸しぐさ 越川禮子 朝日新聞社
- ・ マンガ版「江戸しぐさ」入門 越川禮子 三五館
- ・ 江戸しぐさの正体 原田実 星海社新書
- ・ 私たちの道徳 小学校五・六年 文部科学省
- ・ 科学の限界 池内了 ちくま新書
- ・ 物理学と神 池内了 集英社新書
- ・ 科学的とはどういう意味か 森博嗣 幻冬舎新書
- ・ 科学と宗教が出会うとき I・G・バーバー 教文館
- ・ ウイキペディア
- ・ 宗定法要式平成版 日蓮宗新聞社
- ・ 充洽園禮誦儀記 日蓮宗声明師連合会